

令和4年度 青森市平和・防災学習事業 報告書



岩手県釜石市の中学生と「青函連絡船戦災の碑」にて

青 森 市

目 次

1	令和4年度青森市平和・防災学習事業 実施概要	1
(1)	趣 旨	1
(2)	派遣（相互交流）先	1
(3)	派遣者	1
(4)	スケジュール	1
①	任命式・事前交流	1
②	相互交流／釜石市中学生の受入	2
③	相互交流／青森市中学生の派遣	2
④	体験報告	2
2	活動の記録	3
(1)	任命式・事前交流	3
○	任命式に参加して	三内中学校 外崎 蒼惟 ... 3
○	事前研修会に参加して	三内中学校 外崎 蒼惟 ... 4
○	オンラインによる事前交流に参加して	南中学校 鳴海 瑠生 ... 4
(2)	相互交流／釜石市中学生の受入	5
○	三内中学校での防災学習に参加して	浪岡中学校 齊藤 航平 ... 6
○	青森市平和祈念式典に参加して	佃中学校 佐藤 丈 ... 6
(3)	相互交流／青森市中学生の派遣	7
○	釜石鶴住居復興スタジアムを見学して	浪打中学校 菅原 豪 .. 10
○	鉄の歴史館を見学して	三内中学校 工藤 未鈴 .. 10
○	釜石市長を表敬訪問して	佃中学校 中沢 香乃華 ... 11
○	いのちをつなぐ未来館を見学して	佃中学校 中沢 香乃華 ... 11
○	釜石市戦没者追悼式に参加して	浪岡中学校 佐藤 千恵里 .. 12
○	釜石市郷土資料館を見学して	南中学校 平沢 唯花 .. 12
○	戦争体験談を聞いて	浪打中学校 木村 華乃 .. 13
(4)	体験報告	14
○	平和と防災を考え、受け継ぐ集いでの体験発表シナリオ・スライド	14
○	平和と防災を考え、受け継ぐ集いに参加した小学生の感想	24
○	平和と防災を考え、受け継ぐ集いに参加した中学生の感想	25
○	平和と防災を考え、受け継ぐ集いを終えて	南中学校 平沢 唯花 .. 28
○	平和と防災を考え、受け継ぐ集いを終えて	浪打中学校 菅原 豪 .. 28
3	活動を振り返って	29
○	青森市中学生（派遣者10名）の感想	29
○	釜石市中学生（派遣者10名）の感想	37

1 令和4年度青森市平和・防災学習事業 実施概要

(1) 趣 旨

先の大戦により戦争被害を受け、また、東日本大震災により甚大な被害を受けた東北の都市へ本市の中学生を派遣し、平和の尊さと地震等の災害に対する防災対策の大切さへの理解を深めます。併せて、その体験を小学生や中学生に伝えるとともに、広く市民に発信することで、市民の平和意識、防災意識の醸成を図ることを目的に実施します。

今年度は、新たに派遣先の中学生を本市に受け入れる相互交流を実施しました。

(2) 派遣（相互交流）先

岩手県釜石市

(3) 派遣者

<青森市>

三内中学校	7年	との外	きき崎	あお蒼	い惟
	7年	く工	どう藤	み未	すず鈴
浪岡中学校	1年	さい齊	とう藤	こう航	へい平
	1年	さ佐	とう藤	ちえり千恵里	
浪打中学校	1年	すが菅	わら原		こう豪
	1年	き木	むら村	はな華	の乃
佃中学校	1年	さ佐	とう藤		じょう丈
	1年	なか中	ざわ沢	かの香乃華	
南中学校	1年	なる鳴	み海	る瑠	い生
	1年	ひら平	さわ沢	ゆい唯	か花

<釜石市>

釜石中学校	1年	か加	とう藤	やま大	と翔
	1年	きく菊	ち池	れ恋	な捺
甲子中学校	1年	ちよかわ千代川	えい瑛	た大	
	1年	あ阿	べ部	もと素	か佳
釜石東中学校	1年	の野	さわ沢	こう暁	ま真
	1年	おがきわら小笠原	さ早	き紀	
唐丹中学校	1年	つ津	だ田	き紗	ら良
	1年	か香	がわ川	ま真	き紀
大平中学校	1年	お小	の野		ふう鳳
	1年	さ佐	さき木	かん葉	な奈

※市内全域での平和意識、防災意識の醸成のため、派遣校は「持ち回り」

※派遣校5校のうち1校の教員1名及び青森市総務部総務課職員1名が引率

※釜石市教育委員会事務局学校教育課職員2名が引率

(4) スケジュール

①任命式・事前交流

6月23日（木） 任命式、事前研修会【青森市役所本庁舎】

7月22日（金） オンラインによる事前交流【青森市役所本庁舎】

②相互交流／釜石市中学生の受入

- 7月27日（水） 避難所設営訓練への参加【三内中学校】
7月28日（木） 青森市平和祈念式典への参加【アウガ】
青森市長表敬訪問【青森市役所本庁舎】
青森市内の平和関連施設の見学【青森空襲資料常設展示室 外9か所】
釜石市中学生との意見交換【青森市議会棟】

③相互交流／青森市中学生の派遣

- 8月8日（月） 出発式【新青森駅】
釜石^{うのすまい}鶴住居復興スタジアムの見学
鉄の歴史館の見学
釜石市長表敬訪問【釜石市役所第4庁舎】
8月9日（火） いのちをつなぐ未来館の見学
釜石市戦没者追悼式への参加【釜石市民ホール】
釜石市郷土資料館の見学
戦争体験談の講話【釜石市役所第4庁舎】
釜石市中学生との意見交換【釜石市役所第4庁舎】
8月10日（水） 解散式【新青森駅】

④体験報告

- 10月3日（月） 平和と防災を考え、受け継ぐ集いでの体験発表及び修了証書授与
【三内中学校】
10月中旬 文化祭での体験発表【浪岡中学校、浪打中学校、佃中学校、南中学校】

2 活動の記録

(1) 任命式・事前交流

◆任命式（6月23日（木） 青森市役所本庁舎）



○小野寺市長から青森市平和・防災学習事業の派遣者に任命され、任命状をいただきました。小野寺市長との懇談の中で、一人ひとりが本事業にける抱負を述べました。

◆オンラインによる事前交流（7月22日（金） 青森市役所本庁舎）



○釜石市の中学生とオンラインで事前交流を行いました。両市の平和・防災の取組等についてスライドを使って紹介し、質問や感想を述べ合いました。

○任命式に参加して

6月23日に行われた任命式で僕は、小野寺晃彦市長から、青森市平和・防災学習事業の青森市を代表する派遣者として直接任命状をいただきました。

そして、「青森市と釜石市の戦争や災害などの違いを学んでください」と話してくださいました。任命式が終わり、懇談のときに、僕たちは、今回の釜石市派遣に対しての決意や意気込みを一人ずつ発表し、戦争がどれだけ悲惨なのか、また、人災（戦争）と自然災害（台風、津波、地震など）の相違点や共通点をしっかりと学んでいく決意を示しました。

三内中学校 外崎 蒼惟



○事前研修会に参加して

三内中学校 外崎 蒼惟



任命式の後、平和や防災に対する事前学習を行いました。津波の到達する範囲を示したハザードマップを見たり、そういった災害に対する防災対策はどのようなことを行っているのかなどを学びました。

初日の任命式や事前研修に参加してみて、初めての出来事ですごく緊張したけど、これから、一生懸命に平和や防災について調べていこうという気持ちになりました。

○オンラインによる事前交流に参加して

南中学校 鳴海 瑠生

青森市の仲間ともあまり話せなかった7月22日、初めて会う、釜石市の中学生10人との事前交流はZoomを使って行われました。



みんなの緊張感がほどけないまま、事前交流はスタートしました。最初は青森市の紹介でした。青森市の紹介は一人ひとりが自分の担当箇所の手紙を作り、それを三内中学校の2人が読み上げるという形になりました。青森市の他の中学校の人たちは、手紙やスライドを見ながら、自分が担当した箇所以外のところを聞いて理解したり、共感したりする様子が見受けられました。質問が来たら、そこを担当した人が答える仕組みになっていたの

で、自分の担当箇所に質問が来るか、質問が来たら何と答えるかなど、少し悩んでいた様子も見られました。釜石市からの質問・感想等の時間では、青森市に興味を持ってくれた人が多く、質問や感想がたくさん来ました。質問や感想が来たときは、発表をした三内中学校の2人のホッとした表情も見られました。

青森市の紹介が終わったら、今度は釜石市の紹介の時間でした。釜石市は、「鉄と魚とラグビーのまち」なのだそうです。青森市の中学生は、このことに「そうなんだ」というような表情を見せていました。僕も初めて知ったため、そのようなことを思いました。質問・感想等の時間では、気になっていることを質問したり、相違点や分かったことを感想として言ったりなど、僕も含めみんな興味津々だなと思いました。そして、釜石市に行き、それを自分の目で見たいと思っているのだなと感じさせるような人もいました。事前交流で、釜石市の下調べができたので、いい日になったなと思いました。



(2) 相互交流／釜石市中学生の受入

◆避難所設営訓練への参加（7月27日（水） 三内中学校）



○PTAや町会等の地域の皆さんによる避難所設営訓練へ釜石市の中学生と参加し、仮設トイレや段ボールベッド、アルファ化米の作り方の実演など、実際に避難所が設営された場合の訓練を体験しました。

◆青森市平和祈念式典への参加・青森市長表敬訪問（7月28日（木） アウガ・青森市役所本庁舎）



○青森市平和祈念式典に参加し、折り鶴を献上しました。本式典には釜石市の中学生も参加しており、中学生が参加する様子を喜ばれる御遺族の方も見られました。

○式典後、釜石市の中学生と小野寺市長を訪問し、これまでの活動内容について報告しました。

◆青森市内の平和関連施設の見学（7月28日（木） 青森空襲資料常設展示室 外9か所）



○青森市内の平和関連施設を釜石市の中学生と一緒に巡りました。各施設では、青森市の中学生がそれぞれ担当する施設について事前に調べたことを説明し、その後、青森市民図書館歴史資料室の工藤室長がパネルを使って解説してくれました。

【青森市内の平和関連施設の見学ルート】

- ①青森空襲資料常設展示室～②諏訪神社～③初代青森平和観音像～④空襲・戦災都市 青森の碑～
- ⑤旧青森銀行本店（現 青森県立郷土館）～⑥青森製氷株式会社～⑦旧公会堂（現 しあわせプラザ）～
- ⑧カトリック本町教会の煉瓦堀～⑨青函連絡船戦災の碑～⑩青森飛行場跡地

○最後に、釜石市の中学生と両市の平和・防災の取組について意見交換を行いました。

〇三内中学校での防災学習に参加して

浪岡中学校 齊藤 航平

三内中学校での防災学習に参加してみて思ったことは、避難場所になっている場所は、様々な人のことを考えた設計になっている作りになっていて、すごいということです。また、エコノミ



ークラス症候群を防ぐための運動や、段ボールベッドで実際に寝てみて感じたこともたくさんありました。やっぱり床で寝ると、段ボールベッドで寝るとでは全然違って、段ボールベッドの方が温かくて安心して寝られると感じました。

お話の中に、避難所で中学生が積極的に動くよということがあり、もし自分の中学校が避難場

所になったとしたら防災学習で学んだことを思い出して、生かしていきたいと感じました。また、具体的なことを想定しての避難訓練はすごく大切だと感じたし、そういうことを備えておけば、いざというときにスムーズに避難所設営や避難などができると感じました。



〇青森市平和祈念式典に参加して

佃中学校 佐藤 丈

7月28日の青森市平和祈念式典は、空襲に見舞われ亡くなられた方や今もどこにいるか分からない方の御冥福をお祈りするため、被害に遭われた方の御遺族や関係者が祭壇に折り鶴を献上するなど、77年前のあの日を思い出すための式典ですが、私たちの世代では興味を持つ人が少ないように感じました。このことから少しでも空襲について色濃く知ってもらうためには、やはりしっかり周りに発信していくことが大切だと思います。



この事業を通して伝えたいことは2つあります。

1つは、青森空襲は自分たちが想像するよりも数十倍の犠牲があつて、考えるよりも感じる恐怖の方が大きいことと、戦争という1つの小さな過ちがやがて大きくなり、関係のない人が徴兵され、一般人を巻き込んだ大規模な空襲で兵士や一般人が亡くなること。

2つは、戦争は喜びや達成感を生むのではなく、たくさんの犠牲と数え切れないほどの悲しみ、怒り、憎しみの負の感情を生み出し、また戦争が起こる悪循環の根源だということ。

このことから戦争は平和な世界を求める時点で絶対に必要ではないと考えます。

これからは自分の身近な平和について考え、今に感謝し、今を大切に生きていきたい。

(3) 相互交流／青森市中学生の派遣

◆出発式（8月8日（月） 新青森駅）



○新青森駅の一角で出発式を行いました。あらかじめ役割分担を決めて、司会や出発の挨拶は中学生が行いました。中学生同士が仲良くなり、結束を深めることは、この学習を進める上でも非常に重要です。たくさんの関係者や保護者の方々に見送られ、旅立ちました。

◆釜石鵜住居復興スタジアムの見学（8月8日（月））



○まず、訪問したのは釜石鵜住居復興スタジアムです。元ラグビー選手だった職員の方が出迎えてくれました。その他にも現役のラグビー選手も働いていました。東日本大震災で被害を受けた場所に建設されたことや、ラグビーワールドカップが開催されたことを聞きました。

◆鉄の歴史館の見学（8月8日（月））



○釜石市は「鉄のまち」です。なぜそう呼ばれるようになったのかを知るため、この鉄の歴史館を訪れました。鉄を作るために西洋の方法を取り入れた人物がいたこと、何度失敗をしても決してあきらめず努力し続けたこと、製鉄所が理由で、戦争の標的になってしまったこと。とても分かりやすく学ぶことができました。

◆釜石市長表敬訪問（8月8日（月） 釜石市役所第4庁舎）



○釜石市の野田市長が温かく迎えてくれました。「釜石市の『^{たわ}搦まず屈せず』の精神を学んで、青森市で伝え、青森市と釜石市の平和を発展させる立役者の一人となってほしい」と述べられました。記念撮影では、右手をCの形にして、「かまいし(C)～」というポーズが流行っていることを教えていただきました。

◆いのちをつなぐ未来館の見学（8月9日（火））



○東日本大震災の被害を後世に伝えること、防災について学ぶことを目的に建てられたいのちをつなぐ未来館を訪れました。ここで、7月下旬に青森市で交流した釜石市の中学生と再会しました。施設スタッフの川崎さんから語られる、実際の体験を交えたお話し、皆、時間を忘れて聞き入っていました。防災のヒントをたくさん学ぶことができました。

◆釜石市戦没者追悼式への参加（8月9日（火） 釜石市民ホール）



○釜石市戦没者追悼式に釜石市の中学生と参加しました。釜石市長の挨拶の中で、青森市から中学生が参加してくれたことへの感謝の言葉が述べられました。一人ずつ名前を呼ばれ、菊の花を手向けました。その様子を見た御遺族の方々が涙を流して話しかけてこられました。戦争から77年が経っていますが、決して心の傷が癒えていないことを感じました。

◆釜石市郷土資料館の見学（8月9日（火））



○二度の艦砲射撃を受けた釜石市。今も残る戦跡の数々について釜石市郷土資料館で学びました。青森市民図書館歴史資料室の工藤室長と同じ言葉を聞きました。「時代とともに建物は古くなり、次々と取り壊され、戦争の跡がどんどん消えていきます。戦争の悲惨さを風化させないようにしっかり語り継いでいくことが大切です。」皆、その一つ一つに真剣に目を向けていました。

◆戦争体験談の講話（8月9日（火） 釜石市役所第4庁舎）



○小学校 5 年生の頃に戦争を経験された秋元厚子さんからお話を聞くことができました。小学生として感じていた戦争の様子、当時の日本の教育のこと、そして戦時下での学校生活や日常生活のこと、今では想像できないようなお話でした。体験談が終わった後も、更に詳しくお話を聞くため、何人かの中学生が秋元さんの近くに行き、質問をしていました。

◆釜石市中中学生との意見交換（8月9日（火） 釜石市内）



○今回の学習の目玉の一つが釜石市の中学生との交流です。お互い中学校 1 年生です。時間のない中、交流できる場面を見つけて交流しました。少し話をするとお互い笑顔になります。東日本大震災を経験した地元の中学生の防災への考えは、青森市の中学生にとって大変刺激になりました。

◆その日の振り返り・解散式（8月8日（月）～8月10日（水） 釜石市内・新青森駅）



○今回の学習で学んだことを青森市の小学生や中学生に伝えることが派遣者としての役割の一つです。每晚、その日の振り返りを行い、10月3日の体験発表に向けて、それぞれがクロームブックを持ち寄り、スライドを共有しながら話し合いました。
○解散式では、学んだことに加え、メンバーへの感謝の言葉が述べられました。この学習を通じて、お互いの絆がとても深まりました。この後、心一つに体験発表に向けて準備作業を進めます。

○釜石鵜住居復興スタジアムを見学して

浪打中学校 菅原 豪

釜石鵜住居復興スタジアムが建てられている場所、鵜住居地区は、東日本大震災により、釜石市で起きた被害の「約6割」の被害を受けた地区です。鵜住居地区での死亡者は「約300人」。そんな甚大な被害を受けた釜石市が復興に向かっていく中、市民の小さな声が生まれました。

『釜石市でラグビーワールドカップができないだろうか』

この言葉は、未来の釜石市を変える言葉となりました。最初は「復興が先だ」と言う人もいました。しかし、釜石市、岩手県、そして全国の人たちが「ワンチーム」になり、釜石市がラグビーワールドカップの会場となり、2019（令和元）年にはラグビーワールドカップの試合が行われました。

私は、釜石市市民をはじめ、岩手県、全国、世界の人々、そして「スポーツの力」によって、釜石市は復興していったのだなと思いました。たくさん被害を受けてでもたくましく復興する釜石市民を見習い、震災によって亡くなってしまった人たちの分まで生きていこうと思いました。



○鉄の歴史館を見学して

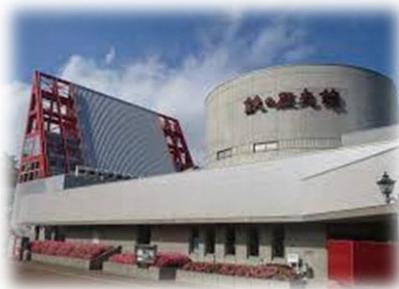
三内中学校 工藤 未鈴

私たちは、鉄の歴史と、鉄と戦争との関係などを学ぶため釜石市にある「鉄の歴史館」を訪れました。釜石市には、最盛期には約

930万トンの年間生産量を誇る日本最大の製鉄所や、世界遺産に登録されている橋野鉄鉱山があり、その歴史が分かる資料が多く残されています。

館内では近代製鉄の父と呼ばれる大島高任の築いてきた製鉄の歴史が分かります。大島高任は、船や、飛行機などの大きな物が作れるようになった近代化のきっかけを作った方で、

館内には、日本初となる製鉄所での銑鉄の取り出しに成功した7メートルの洋式高炉の実寸大の模型もありました。ここでは、昔から釜石市の生活を支えてきた製鉄の歴史がよく分かります。また、釜石市にあった製鉄所が戦争の被害を受け壊されてしまっても、釜石市の人たちは、どうか再開させられないかと必死に復旧作業をしていたそうです。釜石市の人たちは昔も今も戦争や災害で大切なものを失ったり、壊されたりしてしまっても全員が協力し合って復興に向け日々歩んできたのだということがよく分かりました。鉄と釜石市の関係や、釜石市が「鉄のまち」といわれる理由を知ることができたので良かったです。



○釜石市長を表敬訪問して

佃中学校 中沢 香乃華

私たちは8月8日と8月9日に平和と防災について学ぶため釜石市を訪問し、釜石市役所第4庁舎で釜石市の野田市長とお話をしました。

一人ひとりが、自己紹介とその日見てきた釜石鶴住居復興スタジアムや鉄の歴史館などの感想、どんな活動にしていきたいかについて野田市長にお話をしました。

野田市長は、それに対し、お話を振ってくれたり、私たちからの質問に答えてくださったりしてくれました。



○いのちをつなぐ未来館を見学して

佃中学校 中沢 香乃華

いのちをつなぐ未来館は、釜石市の震災を後世に伝えること、防災について学ぶことを目的に2019（平成31）年にオープンした施設で、施設スタッフの川崎さんが、展示している資料を指し示しながら説明をしてくれました。釜石市の死者・行方不明者は927名で、中でも、当時、公民館として使われていた防災センターでは196名が逃げて162名が犠牲になるなど、甚大な被害を受けました。生き延びた方々は、顔一つ分が出る隙間に顔を出し、生き延びたそうです。川崎さんは、避難訓練に参加しているからといっても必ずしも安全ではないということと、もしここがだめだったら…と別ルートを考えるのが大事だとおっしゃっていました。

川崎さんのお話でびっくりしたことは、釜石市の小学生と中学生の生存率は99.8%だったということです。川と海の近くにあった鶴住居小学校と釜石東中学校は、はじめは先生方と一緒に、中学生が小学生の手を取り、800メートル離れたございしょの里に逃げたそうですが、がけ崩れなどがあり、市民の方のもっと遠くに逃げた方がいいという言葉で、ございしょの里から300メートル離れたやまぎきデイサービスに逃げたそうです。しかし、津波が目の前まで来てしまっていて、小学生や中学生だけではなく、大人の方もパニックになってしまったようで、そこからは自分たちの意思で、やまぎきデイサービスから500メートル離れた恋ノ峠というところに逃げたそうです。川崎さんのお話で、元の小・中学校の場所から1.6キロメートル離れた恋ノ峠まで、途中からは自分たちの意思で、逃げたというのを聞いたとき、小野寺市長からの3つの課題の1つである「なぜ奇跡と呼ばれたくないのか」について少し分かったような気もしました。自分たちの意思で逃げたから。それを感じさせるような出来事だったのだなと感じました。大きな発見があったいのちをつなぐ未来館でした。



○釜石市戦没者追悼式に参加して

浪岡中学校 佐藤 千恵里

私たちは8月9日に釜石市戦没者追悼式に参加しました。追悼式では、野田武則市長や、亡くなった方の御遺族のお話を聞き、家族に会いたくても会えないまま亡くなってしまうという言葉



を聞きました。亡くなった方の気持ちを考えると、とても心が痛みます。そして今は高齢化やコロナの影響により、来る人が少ないということも聞きました。このまま来る人が減っていくと、戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えていく人がいなくなってしまうのではないかと思います。戦争を実際に経験していなくても、それを伝え、戦争を起こさないような取組をしていくことは絶対にしなければならないと思いました。この機会を通し自分が戦争を起こさないためにどんなことができるのかを考えていきたいと思っています。

○釜石市郷土資料館を見学して

南中学校 平沢 唯花

釜石市は、昭和20年7月14日に第1回目の艦砲射撃、8月9日に第2回目の艦砲射撃を受けました。2回の攻撃で、多くの方々が被害を受け、さらに街全体が焼け野原となりました。

釜石市は、東北で唯一の製鉄所を持つ工業都市であり、この地域だけで鉄鉱石・木炭・石灰などが揃うため、当初は大規模空襲に見舞われることが想定されていましたが、実際には艦砲射撃の標的になったということです。



こちらの郷土資料館は、釜石市の歴史と文化を語り継いでいくために設置されました。館内は「戦災」「製鉄」「自然」「民族」「歴史・考古」「津波・震災」「企画展示室」の7つの区画に分かれ、「企画展示室」では”釜石の戦跡～未来に遺す戦禍の記憶～”をテーマに、防空壕跡や兵舎跡、砲弾破片貫通跡など、釜石市内の戦跡の写真や説明書が分かりやすく展示されていました。「戦災」のコーナーには、艦砲射撃で実際に射ち込まれた16インチ（約160cm、直径40cm）の砲弾の一部や米軍が実際に使用していた鉄兜、^{やっきょう} 双眼鏡、高射砲葉莖などが展示され、『艦砲射撃 [釜石戦災記] ～太平洋戦争記録映像より～』という、実際に攻撃を受けた映像も流れ、当時の悲惨さも伝えていました。あまりの恐ろしさに息をするのも忘れてしまうほどでした。戦後77年が経ち、今では当時のことを想像するのも難しく、目に付きにくくなっているため、釜石市の戦跡29か所を紹介したリーフレットも作成していて、「多くの人に平和を考えるきっかけになってほしい」という願いが込められた郷土資料館でした。

○戦争体験談を聞いて

浪打中学校 木村 華乃

私たちは釜石市役所で実際に戦争を体験した秋元厚子さんの話を聞きました。

太平洋戦争末期の1945（昭和20）年、当時、秋元さんは小学5年生でした。戦争が始まると、出征兵士の見送り、戦争による食糧不足、数少ないラジオで戦況ニュースに一喜一憂、各家庭の鉄製品の供出、自宅の庭に防空壕を作るなど、非日常が当たり前の日常に変わってしまいました。そして、釜石市は7月14日と8月9日の二度にわたって米英連合軍から艦砲射撃を受け、約800人の尊い命と建物が失われました。そして日本は戦争に敗れました。「日本は神



の国で、天皇は神」と指導された小学5年生の純粋な心から、一瞬にして強い日本像が失われてしまいました。戦争が終わり、77年経ちました。今では、ウクライナとロシアが戦っています。戦争は災害とは違い、人の心から生まれてきます。このことから一人ひとり、思いやりを持つことが大切だと感じました。そして実際に体験してきた方たちの話を私たちが後世に聞き伝えていきたいと思いました。

(4) 体験報告

◆平和と防災を考え、受け継ぐ集い（10月3日（月） 三内中学校）



○三内中学校全校生徒、三内中学校区学校運営協議会委員等、そしてオンラインで市内中学校の代表中学生、三内小学校6年生、三内西小学校6年生が参加し、たくさんの方々が見守る中、チーム一丸となって、学習したことを自分たちの言葉で熱心に伝えました。発表後、小野寺市長から修了証書をいただきました。

○平和と防災を考え、受け継ぐ集いでの体験発表シナリオ・スライド

【1】三内中の外崎蒼惟です。よろしくお願いします。

これから、令和4年度 青森市平和・防災学習事業について報告をさせていただきます。

令和4年度 青森市 平和・防災学習事業報告



三内中学校	外崎 蒼惟	工藤 未鈴
浪岡中学校	齊藤 航平	佐藤 千恵里
浪打中学校	菅原 豪	木村 華乃
佃中学校	佐藤 丈	中沢 香乃華
南中学校	鳴海 瑠生	平沢 唯花

この事業のねらいを確認します。ねらいは、「先の大戦により被害を受け、また、東日本大震災により甚大な被害を受けた釜石市へ本市の中学生を派遣し、平和の尊さと地震等の災害に対する防災対策の大切さに対する理解を深める。また、その体験を小学生や中学生に伝えるとともに、広く市民に発信することで、市民の平和意識、防災意識の醸成を図る」です。

【2】浪岡中学校の佐藤千恵里です。よろしくお願いします。

この事業は、令和4年6月から始まりました。

私たちは6月23日に青森市役所で小野寺晃彦青森市長から、1人ずつ任命状をいただきました。今年の青森市の代表生徒という責任の重さを実感しました。

そして、小野寺市長は、私たちに3つの課題を提示してくださいました。

- 1つ目、戦争と自然災害の共通点や相違点は何か
- 2つ目、「釜石の奇跡」と呼ばれなくなかったのはなぜか
- 3つ目、ウクライナはなぜ、ロシアに降伏せず、戦う道を選んだのか

小野寺市長からいただいた3つの課題

- 1) 戦争と自然災害の共通点や相違点は何か
- 2) 「釜石の奇跡」と呼ばれなくなかったのはなぜか
- 3) ウクライナはなぜ、ロシアに降伏せず、戦う道を選んだのか



私たちは本事業に取り組む中で、常にこの3つの課題が頭にありました。

小野寺市長から出された3つの課題を皆さんとも共有しながら、お話できればと思います。短い時間ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

【3】浪打中学校の菅原豪です。よろしくお願いいたします。

さて、私たちの生活が突如として変わってしまうことがあります。この写真を見てください。ウクライナの今の様子です。この建物は学校でしょうか。よく見ると、窓ガラスはどれも割れ、入口は黒く焦げているように見えます。



大きな建物の前に、私たちの生活では見たこともない車が停まっています。

よく見ると停まっているのではなく破壊されていることが分かります。なぜでしょうか。

建物の前に立つ子どもが見えます。私たちと同じような年齢にも見えます。自分の家でしょうか。友達の家でしょうか。どんなことを思っているのでしょうか。ウクライナがロシアに降伏すれば、このような目に合うことはなかったのでしょうか。

戦争がもたらすもの。

平和について考えるとき、同時に戦争の悲惨さについても考える必要があります。



【4】 佃中学校の中沢香乃華です。よろしくお願いします。



次の写真を見てください。
少し古い写真です。大きな建物が向こうの方に見えます。
建物の前は、全て破壊されているように見えます。

この写真はどのようにでしょう。
右側に海が見えます。陸地からいくつもの煙が上がっているように見えます。
今皆さんにお見せした2枚の写真は77年前、1945（昭和20）年の青森市と岩手県釜石市の街の様子です。



私たちは釜石市を訪問しましたが、実は青森市と釜石市には共通点があるからです。
それは、両市とも東北の中で戦争の被害が大きかった街ということです。

【5】 南中学校の鳴海瑠生です。よろしくお願いします。



釜石市の場所について確認しておきましょう。
釜石市は岩手県の海沿いにある街です。人口は約31,000人です。

青森市が受けた攻撃は青森空襲といい、空から攻撃を受けました。

釜石市が受けた攻撃は釜石艦砲射撃といい、海から攻撃を受けました。

両市の被害状況です。

青森空襲は1945（昭和20）年7月28日、空を飛ぶ爆撃機から2,186発の爆弾が降り注ぎ、焼夷弾は83,000発にも及びました。

死者は1,000人を超えました。わずか1時間少々の空襲でした。

釜石艦砲射撃は二度にわたって行われ、合計5,346発もの砲弾が撃ち込まれました。1分間に約20発、飛んでくる砲弾は大きいもので160センチメートルにもなりました。この攻撃で約800人もの人命が奪われました。



被害状況		
	青森空襲	釜石艦砲射撃
日時	1945年7月28日	1945年7月14日 1945年8月9日
爆弾の数	2,186発 焼夷弾83,000発	5,346発
死者数	約1,000人	約800人

【6】三内中学校の工藤未鈴です。よろしくお願いします。



では、なぜ、青森市や釜石市は戦争の標的になったのでしょうか。

青森市の油川にはかつて飛行場がありました。飛行場は戦争における重要な場所となります。

また、青函連絡船が、青森市と本州を結んでおり、石炭や食料を本州に運ぶ玄関口となっていました。戦争の起点となる場所や、戦争に必要なものが運ばれる場所は標的になります。

こういう役目があった青森市は戦争の標的となり、大きな被害が出ました。

では釜石市はなぜ標的にされたのでしょうか。

当時、釜石市で盛んに作られているものがありました。何だと思いませんか。

答えは「鉄」です。

釜石市は「鉄のまち」と呼ばれています。それまでの日本は砂鉄や木炭から鉄を作っていました。

しかし、鉄を作るために、わざわざ西洋の技術を取り入れた人物が登場しました。

大島高任という人物です。彼は何度も何度も失敗を繰り返しながら、日本初となる製鉄所での銑鉄の取り出しに成功しました。それにより、船や飛行機などの大きな物を作ることができるようになりました。だから、戦争の標的とされてしまいました。

鉄のまち、釜石

- それまでの日本
→砂鉄や木炭から鉄を作っていた
- 大島高任(おおしまたかとう)の登場
→西洋の技術を学んだ大島高任が日本初となる製鉄所での銑鉄の取り出しに成功した
→船や飛行機などの大きなものが作れるようになった
- 戦争の標的となった



【7】浪岡中学校の齊藤航平です。よろしくお願いします。

青森空襲の被害範囲(赤)



歴史資料室 工藤室長

しかし実際は、それだけではありません。戦争の悲惨さはここからです。

青森空襲の被害範囲です。今の地図に重ねてみました。赤い部分が被害範囲です。

今回の研修で、私たちは青森市民図書館歴史資料室室長の工藤さんからたくさんお話いただきました。工藤さんから、「戦争とは軍隊と軍隊が兵器を持って戦うこと」と教わりました。

しかし、青森空襲では、実は、飛行場や青函連絡船など、戦争の起点になっているところを攻撃するではありませんでした。

爆撃機はまず青森市の周囲を囲むように爆撃しました。そして、人々の逃げ道を塞ぎ、その後、囲んだ内側を焼夷弾で徹底的に爆撃しました。街は火の海となり、大きな被害となりました。

青森空襲は、戦略的には価値のない、日本人の戦う気持ちを失わせることが目的の、無差別な空爆だったともいわれています。

釜石市も同じでした。家々が次々と吹き飛ばされ、800人以上の人々が犠牲となりました。戦争は、何の罪もない人々の尊い命を次々と奪います。このことを忘れてはなりません。



【8】浪打中学校の木村華乃です。よろしくお願いします。



て、また同じことが繰り返されるのではないかと心配になります。だから、その悲惨さを風化させないようしっかりと語り継いでいくことがとても大切なのです。」

また、私たちは、青森市平和祈念式典と釜石市戦没者追悼式に参加することができました。そこで戦争を経験された方や戦争で家族を失った方々と出会いました。私たちが折り鶴や菊の花を手向けている様子を見て、涙を流す方々が何人もおられました。戦争から77年が経っていますが、戦争で負った心の傷は決して癒えていないことに気付きました。



今も続くウクライナでの戦争。

この少女が負った心の傷も、77年経っても癒えることはないのでしょうか。

今、ウクライナはロシアに降伏せず戦っています。その理由はなんのでしょうか。祖国のため、家族のため、未来のため……。考えても、私たちにその答えを見つけることはできませんでした。ただ言えることは、戦争が起きる前に、起きないようにしなければならぬことです。

私たち中学生ができること。この青森市で77年前にあった過去の悲惨な出来事を知り、未来の青森市のためにできること、小野寺市長からの課題は、私たちにそういうことを気付かせてくれました。

【9】 佃中学校の佐藤丈です。よろしくお願いします。



ここに3枚の写真があります。

水に家が浸かっています。大量のがれきが街に押し寄せています。

この写真は3枚とも、東日本大震災の被害を受けた釜石市です。

今から11年前の2011（平成23）年3月11日。突如発生した東日本大震災。死者は約2万人にのぼり、今も行方不明者が約2,500人もいます。

私たちは震災の被害を後世に伝えること、防災について学ぶことを目的に2019（平成31）年に建てられた「いのちをつなぐ未来館」を訪れました。施設スタッフの川崎さんが私たちに熱心に説明してくれました。

釜石市の死者・行方不明者は927名。公民館として使われていた防災センターに196名が避難したにも関わらず、162名が犠牲になりました。犠牲者が出た理由の一つに、「防災センターなら大丈夫」という思い込みがあることを聞きました。思い込みは危険、これも教訓の一つだと学びました。ここで私たちはある言葉に出会いました。

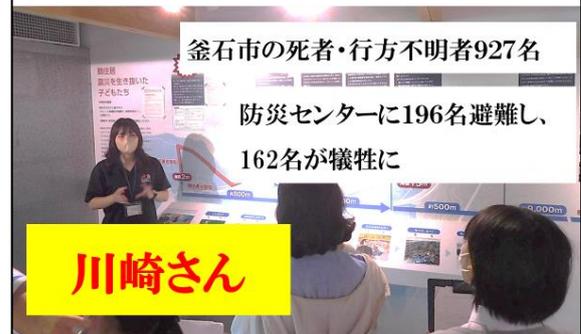
「釜石の奇跡」という言葉です。

東日本大震災

死者	19,759人
行方不明者	2,553人
全壊家屋	12万以上

（2022年3月1日現在）

いのちをつなぐ未来館



【10】南中学校の平沢唯花です。よろしくお願いします。

学 校	児童生徒数	人的被害	施設被害
鶉住居小学校	362名	2名死亡	全壊
釜石東中学校	217名	1名死亡	全壊



**釜石東中
鶉住居小**

小中学生の生存率99.8%

この中学生が行った行為が、「釜石の奇跡」として賞賛されることとなりました。



実は奇跡と呼ばれたい理由は他にもありました。当時の鶉住居小学校の児童の手を引いて避難した釜石東中学校の生徒は次のように述べています。「震災の日、子どもたちの命を救おうと行動した人々は、たくさんいた。水門を閉めにいった消防団の人、避難誘導してくれた住民や先生方。そうやって助けてくれた人たちがいっぱいいるのに、中学生が、自分たちで全部やったように伝えられていることを、申し訳なく感じる。一生懸命尽くしてくれた人たちがいて、私たちは、たまたま助かったのです。」

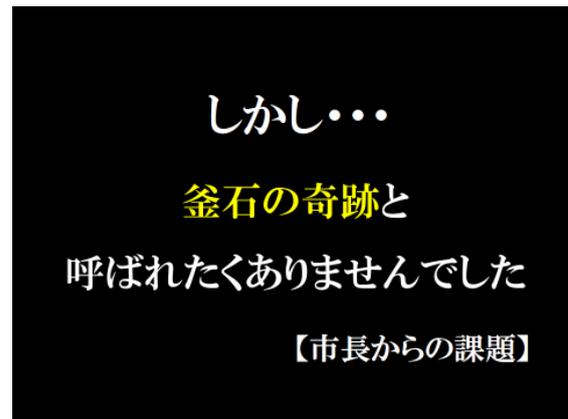
そう語った1人は、なんと私たちに説明して下さった施設スタッフの川崎さんでした。

川崎さんは当時、鶉住居小学校の児童の手を引いて高台に避難した釜石東中学校の生徒でした。今、震災体験の語り部として、釜石市での出来事を風化させないよう懸命に努力されている一人でした。

それは、2つ並んで建っていた釜石東中学校と鶉住居小学校での出来事です。

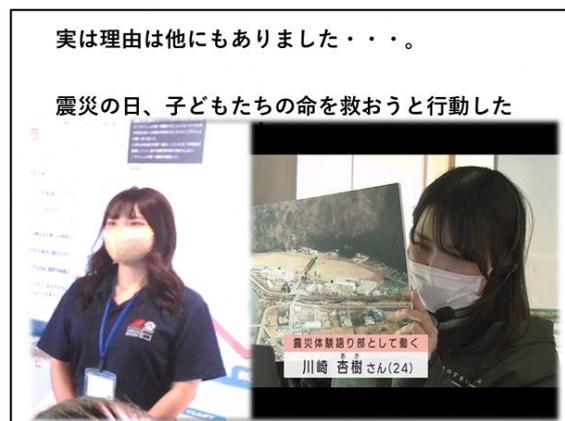
ここにも大きな津波が押し寄せました。この写真を見てください。

しかし、この被害にも関わらず釜石市内の児童生徒の生存率は99.8%でした。釜石東中学校の生徒は地震発生後すぐに避難を始め、自主的に隣の鶉住居小学校に通う児童の手を引いて海拔44メートルの高台にまで避難しました。



なぜでしょうか。これは小野寺市長からの課題でもありました。

それは、震災前からしっかりと地域で避難訓練を行っており、そのとおりに行動しただけだと。それが理由でした。





【大切なこと】
訓練に真剣に取り組む
訓練を行う方々の想いを知る

今年7月下旬に三内中学校を会場に防災訓練が行われました。「みらいねっと」のスタッフが、避難所の運営について分かりやすく教えてくれました。段ボールベッドや、非常食のアルファ化米の実演もしてくれました。避難所でのリアルな生活について一生懸命に伝えてくれました。

釜石市での出来事を学び、もっと真剣に取り組まなければと思いました。私も地震が起きたとき、自分の命はもちろん、他人の命まで守る行動をとれる人になりたいと強く思いました。

【11】浪打中学校 菅原豪さん（2回目）

学 校	児童生徒数	人的被害	施設被害
鶉住居小学校	362名	2名死亡	全壊
釜石東中学校	217名	1名死亡	全壊

東日本大震災で大きな被害を受けた釜石市ですが、復興に向けてある取組をします。

先ほどの写真です。鶉住居小学校と釜石東中学校は津波により全壊し、今は高台に移設し、新しく建て直されています。さて、ここで問題です。この小・中学校があった場所にあるものが建設されました。そして、世界から注目を集めています。さて、何でしょうか。



答えはこの写真です。釜石鶉住居復興スタジアムと名付けました。

私たちもここに入れてもらいました。さて次の問題です。

釜石市では昔からあるスポーツが盛んに行われています。ヒントは、この写真にあります。私たちに説明して下さった職員の体つきです。

答えはラグビーです。ここに3人のスタジアム職員が映っていますが、3人ともラグビー選手です。釜石市は小・中学校の跡地にラグビースタジアムを建設しました。



**2019年 ワールドカップ招致が実現した
フィジー代表 VS ウルグアイ代表**



スポーツの力で世界の注目を集めました

そして、なんと復興の証として、ラグビーワールドカップの開催地に乗り出しました。

2019（令和元）年、釜石市の思いがカタチとなりました。かつて釜石東中学校、鶴住居小学校の場所に建設された釜石鶴住居復興スタジアムに、フィジー代表とウルグアイ代表の試合が実現しました。会場には釜石市の全小・中学生が招かれ、大いに盛り上がりました。スポーツの持つ力で、釜石市は「ラグビーのまち」として世界から注目を集めました。

【12】南中学校 鳴海瑠生さん（2回目）

戦争と自然災害の共通点や相違点は何か

【市長からの課題】

《相違点》

戦争は防ぐことができる
自然災害は防ぐことができない

《共通点》

苦しかった記憶、悲しかった記憶、悔しかった記憶を風化させず、語り継ぐことが大切



さて、皆さんに戦争と災害の話をしてきました。ここに小野寺市長から出された最初の課題があります。「戦争と自然災害の共通点や相違点は何か」この問いは、私たちの考えを分かりやすく整理してくれるものでした。

相違点。それは、戦争は防ぐことができます。自然災害は防ぐことができません。これが相違点です。

戦争が起きるとき、そこには人の心が根底にあります。戦争は、起きないように呼び掛けたりして、防ぐことができると思います。

しかし、自然災害は防ぐことができません。だから、必ず起きることを想定して、準備することが必要です。

そして共通点です。苦しかった記憶、悲しかった記憶、悔しかった記憶を風化させないように語り継ぐこと。これが共通点です。

戦争が起きないようにその悲惨さを語り継ぐこと。

自然災害が起こっても、その対処方法について語り継ぐこと。

【13】三内中学校 工藤未鈴さん（2回目）



青森市と釜石市が平和と防災に強い街に

今回、研修を通して私たちに釜石市の仲間ができました。平和や防災について語り合える仲間がいることはとても心強いことです。

この事業が続き、青森市と釜石市と一緒に平和で防災に強い街になっていくことを願ってやみません。

また、私たちはこの事業を通して、たくさん伝えたいことがあります。その中でも戦争や震災についてありのままの姿で伝えるということが大切だと思います。

被害を受けた方々だけではなく全員が、震災や先の大戦で多くの尊い命が失われたという事実を、それでも支え合いとともに、協力し合いながら、復興に向かって歩んできたという事実を忘れてはならないと思います。

今もなお続く戦争。身近でも、心無い言葉をかけ、平気で人を傷つける人もいます。でも、この学習を通して、改めて、暴言や暴力など些細なことであっても絶対に許してはならないと思います。そして口先だけではなく、行動に移し替えていかなければ、命の大切さを知らず、何も変わっていかないと思います。

最後に今回、たくさんの気づきを与えてくださった小野寺市長、そして今回の事業で出会った全ての方々に心から感謝しています。本当にありがとうございました。これで、私たちの発表を終わります。御清聴、ありがとうございました。



○平和と防災を考え、受け継ぐ集いに参加した小学生の感想

○今回、平和と防災について考え、受け継ぐ集いに参加させていただき、たくさんの新たな発見、思いを見つけることができました。実際の戦争や被災時の写真を見たり、今まであまり知らなかった「青森空襲」や「釜石の奇跡」について詳しく学んだりして、戦争や自然災害は、同じ世界、同じ空の下で起こっていることで、他人事ではないんだと改めて感じるようになりました。特に「釜石の奇跡」が印象に残りました。奇跡を起こした人たちとして称賛された中学生の方々の「実際は違うのに」という罪悪感や申し訳なさを、「奇跡」ではなく「これが普通当たり前」と思ってもらえるように、私もこれから活動していきたいと思いました。戦争や自然災害の爪痕は、時間が経つにつれて衰退していきます。この傷を忘れてしまうと、未来で、また、悲しい思いをする人が出てしまいます。未来の平和のためにも、今度は自分たちがこれからの人たちに語り継ぎ、涙を流す人が少なくなるよう頑張っていきたいと思いません。分かりやすく思いのこもった素晴らしい発表、そしてこのような集いを開催いただき、ありがとうございました。

○「釜石の奇跡」と言われたくないと思っている理由は「訓練でいつもやっていたから、他の人が救出してくださったのに、それを全て中学生がやったと言っているようになって申し訳ない」というものでした。私はこの話を聞き、素晴らしいなと思いました。同じ学年の人などに伝えていきたいと思いました。また、戦争の話では、青森市と釜石市は戦争の標的にされていたことを初めて知りました。死亡者が何人も出ていたことを知りました。私は戦争をその場で見たことがないし、戦争で家族を失ったこともありません。でも今回、平和と防災を考え、受け継ぐ集いに参加して、戦争は今まで生活していたものを壊すだけでなく、いろいろな人を

傷付ける、しかもその傷は一生治らないものだと分かりました。今日勉強したことを忘れずに、これからたくさんの人に伝えていきたいです。

○平和と防災を考え、受け継ぐ集いに参加した中学生の感想

○私が心に残ったのは”釜石の奇跡”と呼ばれなくなかった理由のところですか。私は”釜石の奇跡”と聞いて、釜石市の生徒たちは素晴らしいことを成し遂げたのだと思っていました。だから、なぜ呼ばれなくなかったのかが分かりませんでした。しかし、釜石市の生徒たちは、日頃からの避難訓練、地元の大人、たくさんの方の助けがあってこそだと考えていました。私は、すごいなと思いました。なぜなら、自分の功績だけでなく周りの人々の行動までも称賛していたからです。私なら褒められて”奇跡”と呼ばれて終わりです。なので、すごく考えが大人だなと思いました。また、戦争と災害の相違点についてです。人々の心の上の戦争、自然に起きてしまうのが災害ということに気付きました。災害は防げない、けれど戦争は防げると知って、戦争の悲惨さ、より多くの方の命を救うことのできる考えを受け継ぎたいと思いました。私一人の力ではこの考えは広まりづらいけれど、今日、たくさんの方の学校の生徒さんたちが集まって同じ話を聞いたので、平和を守りたいという思いが伝わってくれればと思いました。災害もいつ起こるか分かりません。なので、釜石市のように普段の避難訓練を本当の災害に生かしたり、避難経路の確認、防災セットの準備などを心掛けたりしたいと強く思いました。

○中学生になってこのような会に参加したのは、初めてでした。戦争は今となっては私たちには身近ではありません。しかし、77年前の2つの市の被害は甚大でした。私たちの住んでいる市が大きな被害があったことは私にとって心苦しいです。そして、釜石市は皆にとって身近な場所ではありませんが、私にとってはとても身近なものでした。なぜなら私の父は釜石市で育ったからです。釜石市には何度か父の母に挨拶をしに行っていたことがありますが、釜石市が、戦争や災害について大きな被害を受けていることは分かりませんでした。しかし今回、釜石市での被害状況をこの授業を通して学び、また釜石市に足を運んだ際には、少しでも被災地などを見てみたいと強く思いました。青森市と釜石市での交流のお話を大切にしたいです。また、このような会を設けてくれた小野寺晃彦青森市市長に感謝の気持ちでいっぱいです。本日はありがとうございました。

○自分でも個人的に青森空襲のことは調べていたので知ってはいましたが、今回改めて聞くと心が傷みました。また、戦争と災害の違いは、戦争は防げるけど災害は防げないという話が出ていたので、青森空襲や現在起きているウクライナの問題もどこかで防ぐことができたのではないかと思います。「釜石の奇跡」と世間では言うけれども、その裏では日頃の訓練などによる結果だと知って、自分も日頃の訓練を大事にしたいと思いました。このような歴史は、誰かが後世に伝えなければ忘れられてしまうので、自分でしっかり伝えていけるようにしたいと思いました。

○はじめのスライドショーで映し出された、数多くの遺品や写真、焼け跡に、とても心が苦しくなりました。私も青森市中央市民センターの展示室に足を運び、実際にこの目でその被害の様子を写した写真や遺品を見てみたいと思います。また、短時間で人為的に多くの命が奪われていったという事実が心が痛みました。一部の人の都合で、深く関係のない人々の日常や命が次々と失われていく戦争の恐ろしさと悲惨さを改めて感じ、ロシアとウクライナの戦争やその他の争い紛争に一刻でも早く終止符が打たれることを願わずにはいませんでした。自然災害は戦争と違い、いつどんな状況で起きるか分かりません。だからこそ、それに備える釜石市の中学生の方々のような日頃の取組が重要なのだと感じました。「釜石の奇跡」と呼ばれる出来事で、それが奇跡ではなく、日頃の成果だったとしても、やはり実際に災害が起きたとき、訓練どおりに動き、私たちと同じ中学生がほとんどの小学生の命を救ったということは、本当にすごいと思いました。そして、震災後、思いが募り、ワールドカップを開催するまでに至った釜石市の人々の写真に感動しました。最後に、この集いを通して、小野寺市長がおっしゃったように、私たちが受け継いだ戦争や自然災害の残酷さ、悲惨さ、重大さについて、今度は私たちが次へ伝えていく番だと実感しました。この集いで学んだことを忘れず、日々の生活に生かしていきたいです。

○青森空襲・釜石艦砲射撃についての被害を聞き、青森市は空から、釜石市は海から攻撃されたことで、大きな悲劇に見舞われたということを知り、アメリカ側からすれば、日本を攻撃することは当然のことであったかもしれないと思う一方、我々がリーダーとなっていくこれからの未来にこのようなことを絶対に許してはならないという気持ちが募りました。戦争は街を破壊し、人々の命を奪うだけでなく、心に大きな傷を付けるという発表に感銘を受けました。

77年前の戦争では、大きな被害が発生しており、今のロシア・ウクライナの状況に近いものがあるのではないかと思います。これからの時代において、戦争の発生を防ぐために、今までの被害を理解し、伝えていくことが大切だということを改めて感じました。

また、戦争と災害についての共通点や相違点についても考えることができました。双方ともに、重大な被害が出るのが予想されますが、災害については、あらかじめ準備することで、被害を最小限に抑えることができると学ぶことができました。戦争については、あらかじめ回避することは難しいかもしれませんが、話し合いや交渉を大切にすることで、発生を防ぐことができるのではないかと思います。現在、世界各地で紛争が起きていますが、日本でこのようなことを起こさないためには、「相手の考えをよく理解し、それを踏まえた上で、自分の考えを共有しようとする力」が大切になってくるのではないかと思います。

また、今回の発表に出てきた、釜石市との地域交流に関して、様々な地域が協力することにより、相互関係を築くことができると感じました。

東日本大震災では、大きな被害が発生していましたが、そのような中においても、中学生と小学生が協力することにより、99.8%の命が助かるという話を聞いて、普段の防災訓練等の、緊急事態に対する行動の仕方をよく理解し、それを生かした行動ができたことが、この奇跡と呼ばれるものにつながったのではないかと感じました。自然災害というものは、日常生活の中に起こりうるものであるため、もしもの際に適切な行動が取れるよう、対策を怠らないことが大切であると感じました。

「防災」「減災」という2つの意識を大切に、いつ災害が起きても、対応することができるように、どのような行動を取ればいいのか、日々考えていくべきであると思いました。

自分とともに、他者を助ける「自助・共助」という考え方がありますが、そのためには、「地域の絆」が何よりも大切になってくると考えます。先日、警察官の方の職業講話を拝聴しましたが、その中に、巡回連絡が行いづらくなり、そのために、「地域の絆」が薄れつつあることが分かりました。東日本大震災では、絆があったことで、助け合い、命を守った方々が多くいたと聞いたことがあります。巡回連絡だけでなく、町内会など、様々な場面で、絆を求めていくことがこれからの社会に必要なようになってくるのではないかと思います。

助け合うことで多くの命を救うことができた2つの学校の跡地にラグビー競技場ができ、その施設でワールドカップの試合が開催されたということは、復興に向けて大きな出来事であったのではないのでしょうか。これまで日本においても戦争や自然災害のために様々な被害を被っていますが、それらを記憶し、これからの未来につなげていく姿勢を大切にしていきたいというように感じました。

○平和と防災を考え、受け継ぐ集いを終えて

南中学校 平沢 唯花

今回、無事に体験発表を終えることができ、ほっとしています。

様々なアクシデントや直前の変更もあり、いろいろと大変なことはありましたが、6月23日の任命式から約3か月、学校生活や行事をこなしながらも多くの場所を訪問し、感想や資料まとめにたくさんの時間を費やしてきました。今日この日を迎えられることは、感慨深いものでありました。

そして、三内中学校の生徒だけではなく、市内の小学生や中学生もオンライン参加をすることで、平和を受け継ぐ思いは私たち10名のほかにも、確かに広がり始めました。

どうか、みんなの思いが形になりますように。切に願っています。



○平和と防災を考え、受け継ぐ集いを終えて

浪打中学校 菅原 豪

今回、このような事業に参加させていただき、本当にありがとうございました。

私自身、現在起きている、ウクライナとロシアの戦争や地震がとても怖くて、怯えていたのですが、学習会で学んだ地震のこと、これから起きるだろうと予測されている地震のことや対策方法なども知り、すごく安心しました。

派遣でも、いのちをつなぐ未来館での勉強で、リアス式海岸の影響、また、「釜石の奇跡」について、小野寺市長からの3つの課題の1つとして出された「『釜石の奇跡』と呼ばれたくないのはなぜなのか」ということなども勉強でき、とてもたくさんの知識を身に付けることができました。

その他にも、今から77年も前に起きた戦争について、知っている人が少なくなっていることを知り、後世に伝えていくことの重要性にも気付くことができました。

今回の事業を先導してくださった先生方をはじめ、青森市役所の職員の皆さんなど、たくさんの方々に協力してもらい、行うことができたこの事業には感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。



3 活動を振り返って

○青森市中学生（派遣者10名）の感想

平和・防災学習事業を通して

三内中学校 外崎 蒼惟

青森市の代表派遣者として、釜石市を訪れることができました。

その中でも印象に残ったものは2日目の釜石市戦没者追悼式への参加、釜石市郷土資料館の見学、戦争体験者秋元さんによる戦争体験談です。

釜石市戦没者追悼式では、釜石市戦没者遺族会の代表の話を聞いたり、献花を行ったりして、兵隊に徴集された人が、遺族の皆さんに思いを預けて戦場に行って、これからの日本のために戦ってくれたのだなということを考えながら参加できました。これからの日本でこのように多くの人が兵隊に徴集されるような大規模な戦争は起こってほしくないなと思いました。

釜石市郷土資料館では、戦争時に空から砲撃する軍隊などが使っていた砲弾などの実物があったり、昔の道具があったりして、今と昔ではだいぶ技術が進化しているのだなと思ったし、戦争がこんなにも残酷で悲惨な出来事だということを改めて思い知らされました。また、平和像が釜石市の永久平和を祈念するために市の予算を計上して作られたということも分かりました。

そして、秋元さんによる戦争体験談を聞いて、戦時中の日常は本当に大変な生活を送っていたのだなと思い、実際にあった戦争がこんなにも悲惨なものだという認識を改めて持つことができました。その後、釜石市の中学生と意見交流をしました。その中で貴重な意見を聞くこともできました。

今回の事業を通して、学んだことや感じたこと、釜石市の中学生との交流会で聞くことができた新たな意見などを周りの人たちにどんどん伝えていきたいです。

風化

三内中学校 工藤 未鈴

青森市と釜石市との平和・防災学習事業の相互交流に参加し、釜石市を訪問しました。

1日目、釜石鶴住居復興スタジアムと鉄の歴史館へ行きました。釜石鶴住居復興スタジアムは、東日本大震災によって甚大な被害を受けた釜石市（鶴住居地区）にあった元の鶴住居小学校・釜石東中学校と同じ場所に建設されました。釜石鶴住居復興スタジアムができたきっかけは、一人の「ワールドカップを釜石市でやらないか」という言葉だったそうです。元の生活とは程遠いような苦しい生活を強いられていた中、最初は良くは思われませんでした。ですが、小さな声が大きくなり、やがて、岩手県、東北、全国へと広まり、夢が叶ったということでした。苦しい中でも、立ち上がろうとする街の素晴らしさがあってこそ、ここまで美しい街ができたのではないかと思います。

また、鉄の歴史館では、大島高任さんをはじめとする、鉄の時代を作ってきた人たちの凄さが分かりました。もともと日本で行われてきた、たたら製鉄は、砂鉄と木炭を利用して作っていましたが、大島高任さんが用いた、西洋の製鉄方法で大きく進歩しました。

2日目、いのちをつなぐ未来館、釜石市戦没者追悼式、釜石市郷土資料館、戦争体験談の4つの研修がありました。いのちをつなぐ未来館は、東日本大震災によってどのような被害が出たの

か、どのように逃げたのかなどが分かる施設です。東日本大震災は2011（平成23）年3月11日午後2時46分ごろマグニチュード9.0の大きな地震が発生し、その地震から30分から40分後に、太平洋に面している青森県、岩手県、宮城県、福島県に大きな津波が押し寄せました。その津波がどこまで来たのかを表す浸水区域マップや、瓦礫の中から見つかった住民の日用品など、津波の悲惨さを物語る展示品がたくさんあります。

釜石市戦没者追悼式では、釜石市で起きた戦争のこと（艦砲射撃など）について、もっとたくさんの人に伝えていただくとともに、風化されつつある戦争のことについて、歌や詩、式典を開催することで、少しでも多くの人に残していこう・伝えていこうという人々の努力や思いが伝わりました。

釜石市郷土資料館は、館長さんのお言葉や、映像やたくさんの展示品を実際に見せていただきました。ここは、新しい発見や考えがたくさんあった場所でした。艦砲射撃についての詳しいお話をたくさん聞かせていただくことができて良かったです。

戦争体験談では、戦争があった昭和16年以降の生活の様子（人々の暮らし）や、どんな場所に逃げていたのかがよく分かるお話をお二方から聞くことができました。どれだけ辛かったか、どれだけ苦しかったかは、実際に体験していないため、全て分かるわけではないですが、それでも、風化させない、忘れさせないためにも大切なことだと思います。

この青森市平和・防災学習事業に参加して、一番忘れてはならないと思ったことは「風化」です。どちらも苦しかった記憶、悲しかった記憶、悔しかった記憶が、時間とともに消えつつあるという現状をしっかり受け止め、どんな過去であっても、隠さず真っ直ぐ伝える釜石市の力強さと、「^{たわ}撓まず屈せず」という言葉のように生きる素晴らしさを持っている市だと感じました。

平和・防災学習を通して考えたこと

浪岡中学校 齊藤 航平

釜石鶴住居復興スタジアムは防災の対策以外にも、ハイブリット天然芝や、釜石市内の木を使っているなど様々な工夫が見られました。防災の対策では、足を傷めた人などのために、高いところにつながっている別の避難道があったり、土地が5センチメートルかさ上げされていたりしていました。

鉄の歴史館では釜石市が「鉄のまち」と世界に広く認識されるまでにどんな歴史があるか分かりました。特に、当時一番大きい溶鉱炉が7メートルなのに対して、今一番大きい溶鉱炉が100メートルという話を聞いてとても驚きました。釜石市で鉄を作るのが厳しい状態になっても、あきらめずに頑張ってくれたことで今の暮らしがあるのかなとも思いました。

いのちをつなぐ未来館は、津波での被害状況を物語る様々な展示物や子どもたちが自分の命を守るために自分の判断で逃げた内容が記載された展示物が数多くありました。自分の判断で逃げたというお話から、自分の命は自分で守るしかないことを学び、避難するときになったら参考に、自分の命を守りたいと思います。

釜石市戦没者追悼式では、多くの方々が亡くなったこの日を忘れてはいけないと思いましたし、自分たちが語り継ぐ気持ちで頑張りたいと思います。

釜石市郷土資料館ではいろいろな戦争の悲惨さが分かる建物や物が無くなっていることを知り、戦争の悲惨さが分かるものを無くしてはいけないと感じ、これから戦争の資料などを使ってどう伝えればいいたろうと思いました。

戦争体験談では、実際に戦争を体験した方の貴重なお話を聞くことができ、本や映像ではやっぱり分からない部分もあったりするということが分かりました。また、今どんどん戦争を体験した人が減ってきている中で、どうやってその部分を引き継ぎ、次の世代にどうやってつなげて、平和を保っていくかが重要だと考えました。

また、青森市にも各地に戦争の悲惨さを伝えるような建物や資料が残っていて、それを実際に見て分かることもありました。今そのようなものが失われている中で、どう伝えていこうか考えようと思いました。

釜石市に足を運んで

浪岡中学校 佐藤 千恵里

私が釜石市へ行き、心に残った研修、場所は3つあります。

1つ目は、釜石鶴住居復興スタジアムです。釜石鶴住居復興スタジアムは、元は釜石東中学校と鶴住居小学校で、東日本大震災の津波により甚大な被害を受けました。そんな中、ラグビーワールドカップを開こうという声が上がりました。それは実現し、ラグビーワールドカップの開催が決まりましたが、スタジアムが無いのでスタジアムを作りました。私は、このスタジアムは釜石市の人の思いが詰まったスタジアムだと思いました。そして釜石鶴住居復興スタジアムはスポーツの会場だけでなく、災害が起こったときの二次避難所にもなっているそうです。災害に対する意識が年々薄れていく中、早く逃げられないなどの理由で逃げ遅れる人を出さないようにしっかり対策もされていて、いろいろな場面を想定している釜石市の取組は、三内中学校で行った防災の研修での誰一人取り残さないという青森市の取組と同じだと思いました。

2つ目は、いのちをつなぐ未来館です。驚いたのは防災センターという建物は公民館として使われていたことや、そこで避難訓練が行われていたため、誤解をした人がたくさんいたということです。しかし、防災センターの防災設備は万全ではなかったのもあってか196人中34人しか助かりませんでした。これを聞いて私は、自分が避難しようとしている場所が安全かどうかしっかり確認するなど、自分の防災方法について一度確認してみたいと思いました。また、釜石市の中学生の方にもどう思ったかを聞いてみました。「自分はそこにはいたが、ほぼ記憶がない状態。実際に体験した人にアドバイスなどをもらい、自分のできることを探していきたい」と話していました。私も実際に経験したことはなく、津波の被害があまりない地域に住んでいることもあり、「津波についても考える機会があまりなかったな」と思いました。私もこの機会を生かし、「できることを探していきたい」と思いました。そして「釜石市の奇跡」について、どうして釜石市の人たちが奇跡と呼ばれたくないかが分かった気がしました。釜石市の小・中学生や地域の人たちの日頃から取り組んでいた防災がたくさんの人の命を救ったのだと思いました。

最後は、釜石市戦没者追悼式です。追悼式は艦砲射撃で亡くなった方たちを追悼しています。また、追悼式に参加した方の話を聞いたところ、コロナや高齢化により参加する人数が減っているそうです。これを受け私は、参加する人数が減ってしまうと、戦争での出来事を伝える人が少なくなっていく中、更に減っていってしまうのではないかと思います。平和や戦争への意識が薄れていく中、とても大変なことだと思います。記憶を風化させないため自分にできることは何か、今一度考えてみてほしいと思います。

今回の釜石市への派遣は、自分の防災への取組を見直し、戦争での出来事がどれだけ悲惨で忘れてはいけないものなのかがよく分かるとっても大事な3日間になりました。

たくましく

浪打中学校 菅原 豪

私は、釜石市のように、「たくましく」生きたいです。

私は、釜石市のように、「力強く」生きたいです。

私は、戦争のことをあまり知らず、テレビで他人事のように見ていただけでした。今から77年も前、祖母ですらまだ生まれていないとき、「たくさんの人が亡くなったのだな」「日本は大変だったのだな」と客観的に見ていました。

また、東日本大震災のときの記憶もありません。「津波が建物の2階ぐらいまで来たのか」とか、「冬だったから大変だったのかな」とか、そういう感想しか持てませんでした。

しかし、今回このような「平和・防災学習事業」に参加したことで、平和の大切さ、防災の大切さを勉強することができました。

1日目は、釜石鶴住居復興スタジアムを見学しました。なぜ、釜石市が「魚と鉄とラグビーのまち」なのか、このキャッチコピーを初めて聞いたときから思っていました。しかし、釜石鶴住居復興スタジアムを見学し、ボランティアスタッフの佐伯さんのお話を聞き、昔は「新日鐵釜石ラグビー部」が日本選手権大会で驚異の7連覇を成し遂げ、それも後押しし、今の釜石シーウェイブスRFCがあり、釜石市が「ラグビーのまち」になっていったことを知りました。

また、復興に向かっていく中、釜石市民の一人の「釜石市でラグビーワールドカップができないだろうか」の一言で、釜石市の人、岩手県の人、それ以外にもたくさんの人の協力で、釜石鶴住居復興スタジアムが作り上げられたということに驚きました。

2日目は、いのちをつなぐ未来館を見学しました。特に、僕が印象に残っているのは、震災当時、東日本大震災の影響で建物が全壊した唐丹小学校で使われていた、月行事予定が書かれている黒板が展示されていたことです。3月11日は、通知表が渡されていたことが分かりました。その他にも、震災が起こった3月11日の1週間後には、卒業式が予定されていたことなど、見ていて、とても胸が苦しくなりました。

その他にも、釜石市は艦砲射撃を二度も受け、たくさんの人が亡くなったことや、「鉄と魚とラグビーのまち」にあるように、なぜ「鉄のまち」と呼ばれたのかなど、たくさんのことを、今回の事業を通して学ぶことができました。

東日本大震災や二度の艦砲射撃を受けた釜石市ですが、決して屈せず、「たくましく」復興していき、現在の素晴らしい釜石市になったことを忘れず、これからの教訓として、自分も、釜石市のようにたくましく、力強く、過ごしていきたいです。

派遣を通して

浪打中学校 木村 華乃

私はこの3日間の授業を通して、平和と防災のことを学びました。

1日目は釜石鶴住居復興スタジアムと鉄の歴史館に行きました。釜石鶴住居復興スタジアムでは東日本大震災の影響によって3階まで水が襲い、鶴住居小学校、釜石東中学校が無くなり、何も無くなった平野に釜石市民や全国、世界の人々の支援によって、今の「釜石鶴住居復興スタジアム」が完成し、ラグビーワールドカップが無事に開催できました。みんなの「ワールドカップ

をやりたい！！」という気持ちが強く伝わりました。鉄の歴史館では大島高任が国で初めて鉄鉱石精練による出銑操業に成功したことにより、今の飛行機やタイヤのワイヤー、ホチキスの針などに鉄が多く使われるようになりました。大島高任のおかげで釜石市や世界は成り立っているのだなと感じました。

2日目はいのちをつなぐ未来館と釜石市郷土資料館に行き、戦争体験談を聞きました。いのちをつなぐ未来館では東日本大震災での津波でたくさんの死者や行方不明者、被害家屋があったこと、津波は地震の強さによって高さや大きさが変わることが分かりました。防災センターに避難した方々もいましたが、津波の避難場所ではないため、すぐに津波にのみ込まれてしまいました。生き残った方もいましたが、3日後に救助が来たため、それまでに低体温症で亡くなった方もいたそうです。このことから、建物が全て安全だとは限らないというのが分かりました。

釜石市郷土資料館では戦争と津波のことを学びました。なぜ釜石市が狙われたのか、それは大島高任のおかげで鉄を得たことから狙われたそうです。二度にわたる艦砲射撃を受け、たくさんの死者や行方不明者が出ていることが分かりました。戦争で多くのものが無くなってしまふのだなと改めて知りました。戦争体験談では、実際に戦争を間近で見てきた人の話を聞いて、死者や行方不明者が多いこと、「日本は神の国であり、天皇は神である」と指導され、信じていたこと、出征兵士の見送り、代用食の普及、ラジオや回覧板を通して戦況ニュースを聞く、各家庭の鉄製品の供出、庭に防空壕を作るというのが日常になっていたこと、戦後日本が敗戦したことを知り衝撃を受けたことなど、テレビや本に書いてある知識よりも多くの「知らない」が知れたのでいい勉強になりました。

今回の派遣を通して、前よりも平和や防災への意識が高まり、一緒に勉強した仲間とも絆が深まり、飽きずに楽しい3日間が過ごせたので、またみんなと活動して、学んできたことをたくさんの人に知らせていきたいです。

事業全体の感想

佃中学校 佐藤 丈

1945（昭和20）年7月28日、青森市は大空襲に見舞われ、一夜で焼け野原になりました。空襲を経て、死者、負傷者合わせて1,000人以上の人が犠牲になりました。



あれから77年。空襲で焼け残った建物は老朽化のために取り壊され、空襲を経験した人は今は少なくなり、そのときの経験や記憶が忘れられ、戦争や空襲について理解していない人が多くなっていくと思います。

このことから戦争や空襲の恐ろしさは薄れ、忘れ去られ、今のコロナ禍の状況も相まって、戦災の恐ろしさを後世に伝えることができない今、それぞれが空襲などの恐ろしさについて学び、戦争や空襲のことを発信していく必要があると思います。

まず、「それぞれが空襲などの恐ろしさについて学ぶ」。これを実現させるためには一人ひとりが空襲について詳しく調べるきっかけが必要だと思います。そこでこの平和・防災学習事業はそのきっかけを作ってくれました。この事業に参加する前は、小学校の歴史で少し学んだくらいで、そこまで詳しくはなかったのですが、この事業の研修会を通して青森空襲と関係深い場所を

10 か所回りました。

その 10 か所の中でも一番心に残った場所は青森飛行場です。理由は、油川小学校の校庭に跡地があり、自分の身近な場所で 77 年前、空襲で大きな被害があった跡があるからです。

この研修会で学んだことを同じ世代の人の頭に少しでも残すためにしっかり周りに発信していきたいです。

つなげる

佃中学校 中沢 香乃華

私たちは 8 月 8 日から 10 日までの 3 日間、平和と防災について学ぶため、釜石市へ派遣されました。戦争があった頃は生まれておらず、東日本大震災が起こった 2011（平成 23）年はまだ私も小さく、覚えていることも少なかったけれど、現在も戦争が続いている国もあれば、大きな地震などもあり、この貴重な経験を伝えて、つなげていきたいです。

私が心に残った経験は主に 3 つあります。1 つ目は、2 日目に行きたいのちをつなぐ未来館です。ここでは、震災について、スタッフの川崎さんが施設で展示している資料を指し示しながら詳しく解説してくれました。その中でも、心に残ったところがあります。東日本大震災の釜石市の死者、行方不明者は、927 人だったそうですが、小学生と中学生の生存率は 99.8% だったそうです。99.8% という数字にも驚きましたし、当時の小・中学生がきちんと自分の判断で逃げたこと知り、それについても驚きました。

2 つ目は釜石市戦没者追悼式です。これは、滅多に経験できない貴重な体験でした。自分の名前が呼ばれたときはドキドキしました。しかし、追悼式では、戦争で亡くなられた方を慰める場なので、緊張しながらも、きちんと追悼式に参加しました。釜石市では太平洋戦争中、二度に渡る艦砲射撃を受け、多くの犠牲者を出しました。釜石市は、「鉄のまち」と呼ばれるほど鉄の生産が盛んで、当時は釜石製鉄所がありました。鉄は戦争遂行には欠かせません。しかし、そのことが理由で狙われたのです。800 人以上の犠牲者を出した艦砲射撃は、7 月 14 日と 8 月 9 日に行われました。このようなことがこれから二度と起こらないように伝えていこうと改めて思った釜石市戦没者追悼式でした。

最後に 3 つ目は戦争体験談です。これも、滅多に経験できない貴重な体験でした。実際に、当時の話を聞くのは少し苦しいところもありましたが、当時のことを実際に聞くのは貴重な体験だったので、それを嘔み締めながら、聞いていました。私たちに戦争体験をお話くださった、秋元さんは小学 5 年生のときの体験についてお話してくださいました。特に心に残ったのは、「強い日本像」という言葉でした。秋元さんは、日本が自分の中での誇りであり、きっと勝つだろうと思っていたそうです。雑音ばかりで言葉が聞き取れないラジオで「負けた」と聞かされると、強い日本像が崩れていってしまったそうです。実際に私がその場所にいたら、きっと悲しいし、裏切られたような気持ちになってしまうと思います。

この経験を通じて、自分だけでなく、たくさんの人に伝えて、一日一日を大切に過ごしたいと思いました。いつ襲ってくるか分からない恐怖が終戦後の今でも残っているというのは少し悲しいですが、私たちができることを探して、小さなことからでも進めていきたいとも思いました。平和や防災について学んだこの 3 日間は私の大切な学びになり、一生忘れない思い出になりました。

これから自分にできること

南中学校 鳴海 瑠生

事前研修や事前交流などで、いろいろなことを知ることができました。

一番印象に残ったことは第二次世界大戦で青森市と釜石市、どちらも物資を乗せた船や製鉄所などが狙われたことです。危険があったらすぐ攻撃するというアメリカや、それに耐えた日本人に驚きました。それを考えると、自分の身にとって危険な力は全て武力を使って消すという考え方は戦争の火種になるのだなと感じました。だから、何があっても武力を使うことは絶対に駄目だと全員が理解しなければならないと思いました。

もう1つ印象に残ったことがあります。それは、災害が起こったときの避難場所では中学生が役に立つということです。中学生になるとある程度の知識と力が付きます。その知識や力が役に立つときが、災害が起こったときなのだなと思いました。万が一のことが起こったときは、自分のことより、高齢者や小さい子どもを優先させることも災害時、自分にできることの1つです。もし、避難所での生活をしなければならない状況になったら、今、自分にできることを常に考え、それを行動に移すということをやっていきたいです。

僕はこれからみんなに伝えていきたいことが2つあります。1つ目は戦争の悲惨さです。今回学んだ戦争の悲惨さをいろいろな人に伝えていくことで、戦争の恐ろしさを知り、戦争を起こさないように努力する人が増えると思うからです。戦争を起こさないためにできることを積極的にやっていきたいと思います。

2つ目は災害が起きた後の避難所では誰であろうと自分にできることがあるということです。小学校中学年の人でも高齢者や自分より小さい子に対して、必要なものを譲ってあげることくらいはできます。些細なことでもいいのです。自分が今ここで何ができるかを考えていくことが避難所での暮らしで一番必要なことなのです。

どんな場所でも自分にできることは身近にあります。たとえそれが災害が起こった場所でも、何もない平和なときでも。自分にできることを考え、それを実行することでそれが誰かの命を守ることにつながるのです。命は何よりも守らなければいけない。それを考えると、自然と自分にできることを考えるようになります。それはとても大事なことです。今回の平和・防災学習事業ではそのことについてしっかり学べたので、良い経験になりました。

互いを信じてそれぞれが逃げる「命てんでんこ」

南中学校 平沢 唯花

今回は、大変貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

6月23日に任命式を終え、青森市の代表としての責務を全うしようと強く決意し、今回の学習に臨みました。今日までの間に、青森大空襲やコロナ禍の防災対策、釜石市の艦砲射撃や東日本大震災など、多くのことを学んだあつという間の1か月半でした。

私が今回の学習を通して学んだことは、平和の尊さと、いざというときに安全に避難できる知識を持つことの大切さです。

岩手県釜石市の中学生の皆さんと一緒に活動したのは、青森市の三内中学校で行った避難訓練でした。私自身、初めてコロナ禍での対策を学びました。生存確認のためのカードを記入し提出

したり、防護服を着た方による検温、濃厚接触者や熱などの症状がある人を分けたり、状況に合わせたテントや段ボールベッドの設営を行いました。段ボールベッドを利用することで、床からの距離を確保して衛生面を保ったり、高齢者には起き上がりやすいなどの良さがあったりすることも分かりました。6月27日の新聞に、身近に迫る災害の危機を知るのに気象庁の情報サイト「キキクル」や、新たに始まった「線状降水帯予測」を活用することが備えに役立つという記事がありましたので、災害の危険度を知り、災害に応じた避難や備えをしっかりとすることも大切だと感じました。

そして、今から77年前の昭和20年7月28日。青森市は空襲を受け、一夜にして街は廃墟と化し、1,000人を超える多くの命が失われました。「青森空襲資料常設展示室」で説明して下さった工藤さんは「戦争とは”軍隊と軍隊が兵器を持って戦うこと”で、そういう視点で見ると、軍隊同士で戦っていない空襲は戦争ではない」と教えて下さいました。罪なき人の尊い命が失われるということは、二度とあってはならないことだと感じました。そして、たくさん展示してあった資料はそれらを伝えるための重要なもので、資料だけではなく、私たち中学生が平和の尊さを伝えていくことも、選ばれた責務だと感じました。

また、岩手県釜石市でも、昭和20年7月14日と8月9日に二度の艦砲射撃を受け、800人以上の尊い命が犠牲になり、製鉄所も損害を受け、市街地も焼け野原になりました。釜石市郷土資料館で実際に見た16インチの砲弾や防空壕の戦跡、映像等は、戦争を知らない私の想像を遥かに超え、本当に凄まじいものでした。戦争を体験した秋元厚子さんのお話でも、当時の恐怖や惨劇の様子が伝わってきました。「鉄の歴史館」や「釜石市郷土資料館」は、釜石市の歴史や文化、戦跡の記憶を後世に受け継ぐために大切な場所だと感じました。

そして、平成23年3月11日。釜石市鶴住居地区を襲ったマグニチュード9.0、震度6弱の地震と巨大な津波。この東日本大震災では、多くの方が犠牲になり壊滅的な被害を受けました。私たちが案内していただいた「釜石鶴住居復興スタジアム」と「いのちをつなぐ未来館」は、東日本大震災のときの津波の高さや状況、避難した経路、震災後の希望等、釜石市の今後が明るい未来へ向かうために大事な場所でした。

震災当日、津波が街に迫る中、鶴住居小学校と釜石東中学校の児童生徒は学校から高台へ駆け上がり、津波から生き抜くことができました。『生き抜くことができたのは、偶然や幸運によるものではなく、地域と共に、日々の防災教育を積み重ねる中で、津波がどういうものなのかを学び、それに対してどう行動するのかを考えた成果』でした。復興は今も続いていて、被災した方の心の復興にも取り組んでいました。地域の防災教育が進んでいる釜石市の取組はとても勉強になり、私たちも実践していく必要があると感じました。

今回、平和・防災学習事業に参加させていただき、丁寧に知る機会を設けていただいたことは、とても意味があり、価値のあるものだと思います。戦争も災害もいつどこで起こるかわかりませんので、みんなが防災についての知識を得て、自分で判断して命を守れるように、地域での取組が必要だと思います。

私たちが学んできたことが、青森市や釜石市の明るい未来につながってほしいと思います。お世話になった多くの方々へ心より感謝いたします。ありがとうございました。

○釜石市中学生（派遣者 10 名）の感想

釜石中学校 加藤 大翔



今回の交流で印象に残ったことは、三内中学校の防災の取組に参加して、段ボールベッドや防災グッズを見たことや、実際に中学生が避難所の運営をしているのを見てすごいと思ったことです。

また、戦災遺構の建物や物を見て、戦争の怖さや平和の尊さについて、学ぶことができました。特に、青森空襲

資料常設展示室に行って、空襲の実際の写真や物を見たときに、戦争の怖さや平和の尊さを感じました。

今回、学んだことを生かして、今ある平和を守っていききたいと思いました。



釜石中学校 菊池 恋捺

今回の交流では、青森市のことをたくさん知ることができました。その中でも、平和の活動について、すごく真剣に取り組んでいることが分かりました。

釜石市では、震災のことをメインで学習してきたけれど、釜石市の艦砲射撃のことを知った上で、青森市で学んだことを重ねて考えて

みたら、似たようなことが起きていてすごくビックリしました。

防災学習では、段ボールベッドなど、避難してただただ過ごすのではなく、過ごしやすく生活するための工夫、安心・安全面を考えて行われていました。

青森市で学んだことを共有してみんなに伝えたいと思います。



今回の交流では、防災や平和について、しっかり学べたと思います。僕が考える中で、一番印象に残っているのは三内中学校での「防災訓練」です。アルファ化米、段ボールベッドなどについて、避難所での生活体験を通して新しく知ったことがあったからです。



平和と防災は、ほとんど同じでも、少しずつ違う所があると言われましたが、そのとおりだと思いました。

この交流を通して学んだことを今回だけで終わらせるのではなく、学校の人にも伝えて、広めたいと思いました。

今回はありがとうございました。



青森市との交流で心に残ったことは2つあります。

1つ目は青森空襲資料常設展示室です。なぜかという、青森市の空襲について初めて知り、当時伝単が配られていたこと、そしてその伝単が残っていることに驚きを感じたからです。

2つ目は避難所設営訓練です。東日本大震災のときのことは、正直記憶に残っていないのですが、当時の写真などを見て、当時の避難所と比べてみると、今の時代に合ったいろいろな人々への配慮がなされており、段ボールベッドやアルファ化米を活用したり、妊婦さんなどの女性にもストレスを感じさせないように作られていたりして、青森市の避難所は、すごいと思いました。釜石市にもその技術などを取り入れていきたいと思いました。

この交流事業を通して自分が成長したと思うことは、理解する力だと思います。なぜその建物が建てられたのか、どうして前より変えたのかなどを考えて理解できるようになったと感じるからです。

今回、交流事業で学んだことを、学校の他の生徒たちに伝えて、平和や防災についてより深く考えていけたらと思います。





今回の研修で印象に残ったことは、青森市で1日目に参加した避難所設営訓練です。なぜ印象に残ったかという、住居スペースや段ボールベッドなどがあったからです。この体験で勉強になったことは、どんな人が来ても対応できるように作られていること、床で寝ないような工夫がされていることが分かったことです。

この勉強したことを生かして、釜石市でもこういう段ボールベッドや住居スペースなどの取組を取り入れていくように声かけをしていきたいと思いました。

今回の研修ありがとうございました。



青森市との交流事業を通して学んだことは2つあります。

1つ目は防災学習についてです。私は何回か避難訓練へ参加したことがあります。避難をした後の生活については学ぶことがなかったので、避難したときにいろいろな人が来るから、みんなが住みやすいように工夫しているところがすごいなと思いました。

2つ目は平和についてです。私が心に残ったところは、釜石市の釜石市郷土資料館と青森市の青森空襲資料常設展示室に行ったことです。そ



の2か所の資料を見て、釜石市の艦砲射撃と青森市の空襲の二つの違いを知ることができました。

これから生かしていきたいことは、平和について、戦争は人の心から起きるものなので、それを防ぎたいということです。また、戦争の恐ろしさと平和の大切さを他の人たちに伝えていきたいと思いました。





今回の交流を通して、防災では釜石市と青森市の違いについて詳しく知ることができたので良かったです。

段ボールベッドなどは滅多に見られないので、その体験を生かして、釜石市にも取り入れていきたいなと思いました。

平和の取組では、戦争のときにどのようなことが起こったのかや、当時の物を見れたりしたのがとても良かったです。

この交流を通していろいろな面で成長できたと思うので、とても良かったです。釜石市の取組にも生かしていきたいし、学校の人たちにも、きちんと伝えられるようにしたいです。

そして、私が特に頑張ったことは友達を作ることでした。みんな優しくて明るい子たちだったのですぐに仲良くなれました。修学旅行のように笑いが絶えない交流会になり、とても良かったです。これをスタートとして、これからの未来を私たちが支えていきたいです。



今回の交流を通して、防災の取組では三内中学校の避難訓練に参加して、避難してきた人全員が安心安全な避難所生活を送れるように、テントでスペースを区切ったり、感染症の人を隔離するスペースがあるなどの工夫をしていることを学びました。また、段ボールベッドがあることで、床に直接寝るよりも痛くないし、菌が下に溜まってしまふことを考えると衛生的にもいいと思いました。

また、平和の取組では、実際に空襲などを受けた場所や、物が展示してある場所に行って、その当時のことについて学びました。その中で私が一番印象に残ったのは、青森空襲資料常設展示室です。なぜなら、青森市派遣中学生から青森空襲の説明を聞いたときに、死者が多い理由がアメリカ軍の言うことを聞かなかったからということが驚きだったからです。



今は戦争当時の物が残っていても、古くなって壊れたり、壊れそうになっていて、どんどん少なくなって行って、知っている人が少ないと分かったので、今回の交流で学んだことをできるだけ多くの人に伝えていけるようにしたいと思います。

この交流で学んだことを自分たちの学校でも広めて、考えを深めていきたいし、避難訓練で学んだことを、自分たちの学校の避難訓練でも生かしていけるようにしたいです。



今回の交流で心に残ったことは、青森市の中学生と仲良くなれたことです。おかげで空き時間など楽しく過ごすことができました。

また、青森市での交流で、平和の面で多くの学びを得ることができました。釜石市と青森市、両市の痛々しい戦災遺構を目の当たりにして、平和の大切さを再確認することができました。

ロシアのウクライナ侵攻や、アフリカ地域での紛争

など、各地で平和の大切さへの気持ちが風化していく中、今、僕たち中学生にできることは何だろうと考えることも大切だなと気付くこともできました。

これからは周囲の友達にも平和の大切さを伝えていきたいと思いました。

今回の交流ありがとうございました。



私が今回の交流を通して一番心に残ったことは、三内中学校での避難所設営訓練で、みらいネットの皆さんの「みんなが安心して過ごすことのできる避難所を作りたい」という思いが一番印象に残りました。

防災の取組で感じたことは2つあります。

1つ目は、避難所の工夫です。私が今まで参加してきた避難訓練は、どのくらいの速さで逃げ切れるか、また、どのようにして逃げればよいのかということがメインだったのですが、青森市では、避難した後のことも考えた避難訓練が行われていたのがすごいなと感じました。

2つ目は、アルファ化米や段ボールベッドについてです。アルファ化米や段ボールベッドを初めて見たり、体験したので、釜石市にもあるのかと気になりました。

また、平和の取組で感じたことも2つあります。

1つ目は、戦争遺構を見学して、戦争の怖さや恐ろしさを、今までにないくらい感じました。印象に残っているのはピラです。市民の人たちがピラを読んでいたら、もっと多くの命が助かっていたと思います。

2つ目は、次世代に伝える方法が変化しているということです。戦争で残った建物なども全て残しておくのではなく、一部のみ残すことがこれから増えていくということが、せっかく残ったのにもったいないというか、さびしいなと感じました。



今回の青森市との交流を通して学んだことを、学校の人たちにも広めていき、これからの活動にも生かしていくことができるようにしたいと思います。



東日本大震災からの復興のシンボル「釜石鵜住居復興スタジアム」にて

令和4年度青森市平和・防災学習事業 報告書

発行：青森市総務部総務課

所在地：〒030-8555 青森市中央一丁目22番5号

電話番号：017-734-5042

E-mail：somu@city.aomori.aomori.jp